

【十八禁BL】

とろろきとおか

那涸睡吟

【十八禁BL】

とろきとおか

那涸睡吟

鄭蘭は己の身が擦れる音で浅い眠りから目を醒ました。余人なら気にしない幽かな音ではあるが、鄭蘭にとっては意識して以来未だ以って気にせずには居られないものだ。

鄭蘭の目が覚めたのを契機にして、その音色は静かに高まりを増してゆく。それと動きを合わせる様に鄭蘭の首筋と耳朵は紅く上気する。

「h…ア…ふ…」

どうせ前面に出た自我ではどうにもならぬのだ、と観念してせめてもの気休めに息を逃す。齒を食いしばって呼吸と共に声を殺すよりはいつそ呼吸音で逃してしまっただ方が楽と言うもの。下肢を振じらせる事が出来なくなっただから鄭蘭は閨房に於ける息遣いの何たるやを改めて知った。それは正式な流儀を知らぬままに

身を開き、そしてそのままこの身に墜ちた彼にとっては新鮮な驚きであり、又早く識っておくべきであったかも知れぬと言う悔しさを抱かせるに足る実技であった。

だが、まだ収まるには程遠い火照り具合である。

これが普通の身の上ならば身を振り肢を開いてしまえば少しは外気で冷えて物理的にましになるかも知れぬ。しかしながら今の鄭蘭の持つ熱の逃がし口と言えは喉と脇と臍と胸乳と眼と鼻しか無い。開くべき肢は今は無く、後腔は今己が身によつて開かれ弄ばれているから。

「り…せ…」

絞り出した声に応えは鄭蘭の心に響き返される。

「月が冴えていたのが悪い。その下でわざと眠った貴様も」

静かに響く声。諸共に紅顔で相見えていた時と変わらぬ、深く静かな声。変わっているとすれば心の中に直接響くせい少し軽やかさを帯びている事程度だ。

李戚の応えを聞き、鄭蘭は思惑通りとはこのこの事か、と何とか笑う。李戚は昔からそうだった。鄭蘭の身に触れる時は何某かの口実を必要として、それがないと自ら手をのばさず事をしない。目は爛々と慾を語っているにも拘らず。

身を挺した誘いが成就したのであれば、後は鄭蘭自身もたがを外して良いだろう。

鄭蘭はそれまで己が分身を昂ぶらせていた手を真つ直ぐ下に滑らせ、既に己が尾の先でくじられていた後腔に伸ばしゆっくりと形をなぞりながら差し入れる。

「疾く…来やれ…」

そして、後腔は鄭蘭自身の尾によって更に深く貫かれる。内壁を擦り上げる鱗の感覚に鄭蘭は酔い、静かに意識を手放していった。

鄭蘭の尾を操って絶頂を導きつつ、李戚はこの縁の皮肉さにとだ苦笑いを漏らしていた。

元々李戚も鄭蘭も怪力乱神とは一切縁の無い者として都で暮らしていた。確かにその当時から互いの身の内に精を零す様な体の交わりを持っては居たがそれはあくまでも友としての証であり、又都に住まう者としての嗜みでもあった。互いに髭を生やす前から肌を重ねていたのだから違和感がある筈も無い。

それが変わったのが両者とも世間に出、それぞれ才覚を請われて世事の役に就いて間もない頃であった。鄭蘭が忽然と身を隠したのである。李戚にも世間にも何も告げず。それまでに次々と血縁を無くしていた鄭蘭の後見は、果たして誰もいなかった。鄭蘭はただ李戚とのみ肌を重ね、都人の多くが遣る様に肌を重ねた後見人を近くに置く様な事をしなかったから。

程なくして李戚は自らも勘案した上で後顧の憂いを断ち切つて世事を捨てた。そして無二の友以上の存在と改めて識つた鄭蘭の行方を掴む為に当て所無き旅に出たのである。

李戚が鄭蘭と再び相見えたのはそれから人一人が生まれ世事に着くまでの時が経た後の事。

旅の疲れも重なり常人よりも遥かに老いた李戚。対するは身を

隠した時から一切歳を重ねる事無く瑞々しい様子を保った鄭蘭。否、むしろ元々持っていた僅かな美貌が磨かれ、妖艶さを少し増したようにも視える。

その鄭蘭が半身を隠しつつ言う。

「問う。吾身の価値は御身の富貴と引き換えになる程か？」

「如何にも」

「これでも御身はそう言うか？」

それまで半身しか姿を見せていなかった鄭蘭は気の触れた様に高く晒い努めて隠していた半身を物陰から引き摺りだす。

その半身とは即ち蛇身であった。白くつややかな鱗。そして股座と思しき場所には紅き縦筋。そのすぐ下にはもう少し薄い色の後腔がある。

李戚は静かに跪き、鄭蘭の身を両の腕でしっかりと抱えた上でその後腔に深く舌を差し入れた。漏れそうになる歓喜の声を嚙み殺し身を堅くする鄭蘭の腰と思しき箇所を柔らかに撫で摩りつつ、なおも後腔を味わう。やがて縦筋の合間から現れたやや人のものより荒々しい風情になった茎をもじつくりと舐り、李戚は久方振りに情人の精で喉を潤した。時と共に練り上げられ濃厚になったと思われる精の匂いが二人の身に纏わりつく。

「りせ」

「一人で慰める手筈を識らぬ訳ではあるまいに」

「識ってはいた、が、忘れた」

忘れていた訳では無い。封じていたただけだ、と心の中でそつと言う。

「あれだけ解れていてか？」

からかうような謡う様な言葉に何を感じたか、まだ精を吐いていない方の茎が雫を滴らせながら揺れる。

「御身の口は正直ではないが」

敢えて後の言葉を飲み込む。

「これでも、拒むか？」

「いや」

鄭蘭はその尾で李戚を優しく巻き、甘く締めた。抱擁を模するかの様に。

鄭蘭は半身を蛇身に転じた事で神仙に等しき若さと寿命を得た様であった。が、そう言う身と交わりを持ったからとて李戚の身に何某かの怪異が起こった訳ではなかった。

李戚は命運の理を承知し、自ら人の身に降りかかる滅びの時間の訪れに身を委ねていたが鄭蘭は生憎とそうではなかった。事ある毎に己が精を李戚に注ぎ込む事は勿論、化生となった己が血己が気までも李戚の命の糧としようと心を砕いていた。

「いっそ、俺も蛇身となれば良かったか」

鄭蘭の懸命さを見てつい一人ごちる。そう、それが恐らく理想なのであろう。それこそ身が塵となるまで添い遂げるには。が、それが出来ぬ以上どうすれば良いのか。

蛇…。

そうか、蛇か。

噛み締める様に言葉を繰り返し、己の知を研ぎ澄ませて行った李戚は一つの奇策を思いつくのである。

それは抛り所が一切無い話では無い。寧ろこうなつてみると理としては順当なものだ。後は鄭蘭がそれを人として受け入れる事が出来るかどうか、だ。しかしながら李戚の腹はもう決まつてゐる。己は確かに人であるやも知れぬが、その対にいる者は既に人ではないのだ、と。

そして、切り出す一言。

「鄭蘭」

「なんだ、改まつて」

「俺を、孕んでくれぬか？」

「貴兄をか？」

「そう。貴様の腹の中に俺を挿れてくれ」

「正気か？それは即ち」

「それは違う」

李戚は静かに笑って言う。

「貴様の中に挿る事により、俺は貴様と身を一つにして又活きるのだ」

鄭蘭は、夜の闇とともに李戚の身を飲んだ。

人は孕むと段々と腹がせり出してくるものである。それは蛇身に変じたとしても変わらぬであろう。しかし、鄭蘭の腹は李戚を（孕んで）から日が経つにつれ段々と萎んでくる。それが鄭蘭を哀しくさせた。おれは愛しい男を孕んだのではなくただ糧として貪り喰ってしまったのだ、と。

その哀しみが悦びに転じたのは、李戚が鄭蘭の尾に宿り褥で一

戦を仕掛けたその瞬間であった。

「り」

「成る程これが蛇身と言うものか。存外悪くないものだな」

「ばか、もの」

「叱言は後にしてくれ。俺は餓えているのでな」

鄭蘭の心の中で言うだけ言うと李戚はさつさと後腔を貪る事に専念する。指よりも舌よりも自在に動く蛇の尾。その堅さは暫く忘れていた茎の堅さを想起させるのには充分であった。

それから幾度絶頂に導かれ、更には己を忘れてしまう恍惚に誘われる。蛇身に転じて此の方、鄭蘭は肉の悦びを貪って己を慰める事は出来ても人の情を貪る事は出来なかった。この身に転じた鄭蘭に貪られてしまえば並の人間なら一度で絶命してしまつた

だらうから。

その懼れの余りに絶頂の手前で己を醒ました事が幾度あった事か。

鄭蘭に孕まれた李戚は、鄭蘭を満たす者として転生したのである。

その当の李戚は又それなりの充実感を味わっていた。

確かに精を吐き出す事は叶わぬ身となったが、それはそれで利点ともなる。精を吐き出した後のあの寒々しさを噛み締め直さずとも良いし、又醒めてしまった後に無理に己を奮い立たせる億劫さを味わわずとも済む。

己の代わりに己が半身が大いに乱れるのを視るのもまた一興、と李戚はその身を静かに蠢かしつつ一人ごちる。

そしてふと思い返すのは鄭蘭の胎の中の事。胃の腑でありながら胃の腑でなかった温かな肉の褥の事。あの悦楽を味わう為にならもう一度人の身に生まれても良いかと情人を啼かせ泣かせつつ考えている。

そもそも李戚には鄭蘭の肉の温か味の記憶はあっても身が溶けた記憶がない。胃の腑に入れば身は溶けるものと思いついその痛み怖気を内心覚悟しながら孕まれたものの、肉の褥に包まれている内にただまどろみの様な時が過ぎたという記憶しか李戚は持ち合わせていなかった。まどろみから醒めた時に己が鄭蘭の尾に宿ったのだと悟りはしても。

これもまた怪力乱心の理か、と笑いつつ、慾の赴くままに情人の肉をまた貪っている。醒める事のない静かな焰を少しずつ熱く

しながら。

李戚の立てた仮説には実はまだ少し先があつた。其即ち李戚の意識自体の行方である。

仮に今の状態が未練執着により顕現したものであるならば維持は簡単。常に満足しない様に己を律すれば良いだけの話だ。

しかしもしもそれが他の作用であつたとするならば？

と、疑念だけを抱いて其処で李戚は考える事を止めた。仮説を作った上で慄く嘆くのは容易い事である。しかしそれに気を取られて折角回り逢い満たす事の出来た情人の心を無駄に騒がせて何になる、と。

我は消えぬ。鄭蘭と共に在る為に変貌はしても鄭蘭と共に在る

以上我は我だ。その心さえ忘れなければ、と改めて考えている。鄭蘭を啼かせる手管を考える傍らで。

仮に李戚としての意識が消えたとしてもこの身は鄭蘭の糧となり、そして既にその血肉となつているのである。これもまた共に活きると言う事であろう。慶びを共にする存在であるならば、それで良い。

李戚が彼是と思案を廻らせる一方、鄭蘭は慾の熱を醒ましつつ静かに祈っていた。

李戚と再び並んで月を観たい、と。

その祈りを知ってか知らずか、月は鄭蘭の少し膨らんだ艶やかな腹を白く照らしている。李戚が彼の半身に転生してから今宵で

多分半年だ。

【了】

初出

T w i t t e r 覆面BLウェブアンソロジー 仮面蜜戯

<http://maschera.mimozza.jp/> 二〇一一年一月公開

脱稿…二〇一〇年某日

後書き

これはかつて存在した『覆面BLウェブアンソロジー―仮面蜜戯』に寄稿した内の一編となります。

きっかけはもう朧な記憶となってしまうので、正確を期する為に敢えてここでは開陳しませんが、普段中々書く踏ん切りのつかなかった物語を書く良い切っ掛けを戴いたと北叟笑んだ事は覚えております。

何時の間にかサイトが消失し、復活の気配を二年程待ちました。が気配が無い為、お手隙の時の娯楽にと供する次第です。

那涸睡吟

こと ぶどううり・くすこ

奥付

【十八禁BL】

とつきとおか

【二〇一五年十二月二八日初版】

ぶどううり・くすこ（那涸睡吟 名義） 個人誌

xqo_gm@yahoo.co.jp

※本作は無償頒布品です。

とつきとおか
【18禁BL】

<http://p.booklog.jp/book/103746>

2015.12.28 一部改稿

2016.01.08 一部改訂

著者 : 那箇睡吟 (nagare suigin)

【ぶどううり・くすこ】

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/xqo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103746>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103746>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ